

# 肉牛

岸川瑞恵

信号待ちをしている私の前を、伊万里畜産管理センターのトラックが唐津方面へ走り去っていった。屋根が

付いた荷台には多分牛が繋がれるのであろう。飛び出さないように荷台の周りを、顔が出せる程度の高さに囲っている。伊万里から朝早く牛を乗せていった帰りなのであらうか。荷台は既に空だった。

あのトラックに、今日は何頭の牛が乗っていたのだろう。心の中に何とも言えない風が吹きぬけ、ある日の朝刊に載っていた句が思い出された。

春泥を二人掛かりの糶せりの牛

中村茂彦

「鼻輪を曳かれていく牛は二度と牛舎へ帰ることのない肉牛であらう。だからこそ二人の大人が力いっぱい曳いても抗うのだ。牛は賢い動物という。自らの運命を知っているのだろうか。春泥の輝きが一層哀しい」と、

俳人、長谷川權かみ氏の評があった。

Y新聞の朝刊の二面に、毎日目を留める箇所がある。ハガキ半分ほどのスペース。長谷川權氏が連載するコラム「四季」である。中村茂彦氏の句は、儂い運命にせめてもの抵抗をしている牛の気持ち切なく伝わってきて、私は思わず切り抜き、手元に残しておいたのだった。

二年ほど前、コラムが五〇〇〇回を迎えた日、長谷川氏の短いコメントが載っていた。

「日本人は大昔から「うた」を大事にしてきた。『古事記』『万葉集』など多くの詩歌が詠まれ、これが豊かな水脈となつて現代を潤している。「四季」はその水脈から毎朝一滴ずつ掬い上げて読者と共に味わっている。その一滴が、ある人の一日の、またある人には一生の糧になることを夢見て、これからも書き続けていく」

要約すればこのようなことが書かれてあった。

私は自身の糧になつているかどうかは分からないが、感じたことを短い言葉に託すその巧みさに魅かれて、毎朝目を通す。

最初に書いた俳句が私の心に響いたのは、夫を亡くして間もない頃で、命の尊さを私が敏感に感じて取つていたからかもしれない。

その夫の好物が、皮肉にも伊万里牛だった。

伊万里牛は、佐賀県伊万里市で育てられた黒毛和牛のことである。夫は子供の頃の数年間を唐津に住んでいたので、伊万里牛をその頃知つたのであろう。

通夜の時、斎場の方が伊万里牛のステーキを丁寧に焼いて皿に盛り、遺影の前に置いてくださった。伊万里牛は福岡市ではIデパートの精肉売り場にしかなく、随分探し回つたということである。

皿に載つた肉は肉厚で、我が家では買ったこともないほどの大きなステーキだった。わざわざ伊万里牛を探して、家族も気付かなかつた故人へのお供えをしてくださった御厚意が、私たち家族は嬉しくもあつた。要領を得ない遺族に、手を取って進行の手順を教えてくださいさるばかりか、忙しい最中にも拘わらず、行き届いた細やかな気配りだったと有り難く感じた。

入院中、食事が喉を通らなくなった時でも夫が唯一口

にできたのが、この伊万里牛だった。私は病院の台所を借りて調理した。二センチ角ほどのサイコロに切つた小さな一切れを、更に五ミリほどに薄く切つて焼いたものだったが、見舞いに来てくれていた人にも食べてもらうよう夫は私を促し、口にした人たちが「美味しい」と言うのを聞くと、満足げに自分も小さく切つたものを、二、三切れ口に運んだ。

遠くに暮らす子供たちが休みに帰福した折、夫を偲んで私はIデパートに伊万里牛を買いに行った。私が買うのは安い切り落としであるが、肉の臭みがなく口に入れると溶けてしまいそうなほど柔らかい。

夕食に並べた伊万里牛に箸を運びながら、お通夜と葬儀の二日間のこと誰からもなく話題に上つた。「故人の好きだった伊万里牛」と書いたメッセージと共に、遺影の前に置かれていたステーキが、ジャイアント馬場が履く靴の底かと思まがうようだったと、子供たちがそれぞれに笑い合う。大きな肉の塊がどんと置かれているようで、意表を衝いて驚いたと彼らは話す。

伊万里牛は悲しむ暇もない程の慌ただしかった二日間が過ぎて、漸く寂しさが家族の心に拡がり始めた頃、ちよつとした明るい話題に一役買つてくれた。

あの時のステーキは、故人を見送る最中の目まぐるしい中で、ふと遺族が目を留めほんの束の間、故人の思い

---

出に浸ることができた、斎場の方の心配りだったと私は感じる。

美味しいものを戴く時は自然と笑顔になるが、同時に私は心の隅に中村茂彦氏の句が浮かぶ。こうして食卓に出された肉牛も、競りに出される時は、精いっぱい抗ったのであろう。命を戴くことの重さを知る。

(了)